

## 理由なき憎悪

**「彼らが理由もなく私を憎んだからである。  
ヨハネによる福音書15章25節**

イエスの時代の宗教界はイエスを憎み、ついには死刑にした。彼らがイエスを憎んだのは、イエスの生き方が彼らの生き方に反していたからだ。犠牲の模範によって、イエスは彼らの利己主義を非難し、教えによって、人気のない真理を教えながら、彼らの人気のある誤りを暴いた。

詩篇69:4から引用された冒頭の言葉は、イエスが地上での宣教の終わりの時に弟子たちに語ったものである。イエスは、弟子たちがやがて受けるであろう苦悩と心痛を知っておられ、やがて待ち受ける出来事に備えて彼らの心と体を整えようと努められた。彼は、彼らがつまずくことなく、ペンテコステで聖霊を受け、天の召しのすばらしい特権にあずかる準備ができるようにと願ったのである。ヘブル3:1

## 世評

イエスの宣教中、弟子たちは、謙遜で卑しいイエスに従うだけでは、当時の宗教界の好意を得られないことを学んでいた。大群衆が最愛の主の周りに群がることもあったが、その動機はしばしば、イエスから受けたいと願う物質的あるいは肉的な利益であった。忠実に彼に従おうとしたり、彼の弟子となるために犠牲を払うことを厭わなかったりするほど関心を持つ者はほとんどいなかった。ヨハネ6:26、27、60、66

イエスが十字架につけられる時が来たとき、弟子たちは間違いなく、イエスはどうかして死を免れ、イスラエルの指導者、王としての役割を果たすことができるかと信じていた。彼らは預言者イザヤの言葉を知っていた。イザヤはメシアについてこう書いている。(イザヤ9:7)。しかし彼らは、メシアの王国の栄光に関する素晴らしい預言が成就する前に、まずメシアが世のために苦しみ、死ぬ必要があることを知らなかった。主人とともにその栄光を分かち合うことが彼らの望みであり、それは間近に迫っていると信じていた。

## イエスは死ななければならぬ

イエスは弟子たちに、間もなく訪れる死の必要性を隠しておかれなかった。その時から、イエスは弟子たちに、エルサレムに行き、長老たち、祭司長たち、律法の教師たちの手にかかって多くの苦しみを受け、殺され、三日目に生き返らなければならぬことを説明し始められた。(マタイ16:21)。イエスの発言は明確であったが、従者たちは、イエスの発言には何か別の意味があると考えたに違いない。

イエスは、弟子たちがまだ弟子としての特権を、物質的な利点や、弟子と関わることで得られる栄光の観点から見ていることを知っておられた。イエスはまた、ペンテコステの後、弟子たちが理解する聖霊に包まれることも知っておられた。しかし今、彼らは主の死が実際に起こるという事実を受け入れることができなかった。

## 嫌われるイエス信者

弟子たちは師を愛し、師が神から任命されたメシアであることを確信していたが、栄光と栄誉の前に、師の宣教に伴う苦しみと死があることをまだ理解し

ていなかった。ペテロは後にこう書いている。"彼らは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とその後の大いなる栄光について前もって語られたとき、それがどのような時、どのような状況について語られているのか不思議に思った。

"1ペテロ1:11

私たちが取り上げた聖句の中で、イエスは自分が理由もなく嫌われていることを認め、こうも説明した。私があなただを選んで世から出たので、世はあなたを憎んでいるのです。私があなたに言ったことを覚えている？奴隷は主人より偉くない』。彼らが私を迫害したのだから、当然、あなたも迫害される。もし彼らが私の言うことを聞いていたなら、あなたの言うことも聞くだらう。彼らは、わたしを遣わした方を拒んだのだから、わたしのために、あなたがたにこのようなことをするのである。"ヨハネ15:18-21

しかし、あなたがたは散り散りになり、各自が自分の道を歩み、私だけが残される時が来る。しかし、父が私と共にいてくださるので、私は一人ではない。このことをすべて話したのは、あなたがたが私のうちに平安を持つためである。この地上では、多く

の試練（

）と悲しみがあるでしょう。しかし、わたしは世に打ち勝ったのだから、安心しなさい。"ヨハネによる福音書16章32節と33節

弟子たちに平安と元気を与えるために、散乱と迫害が来るとい警告がなされたというよりも、むしろ、迫害が来たときに、彼らはその本当の意味を理解するようになったということに注意するのがよいだろう。弟子たちはそのとき、自分たちがイエスとともに苦しみを受けるとい大きな特権を得ていることに気づくだろう。イエスが世に打ち勝ち、弟子であり続けるなら、彼らにも世に打ち勝つ力が与えられることを彼らに知ってほしかったのだ。この約束された勝利の保証があれば、世の反対や迫害にもかかわらず、彼らは喜ぶことができる。自分たちが愛する主とともに苦しんでいることを知ることは、忠実に歩み続ける勇気を与えてくれる。

## 克服者

イエスが自らの生涯、宣教、教えの中で示した模範を見れば、クリスチャン生活が敵との闘いの一つであることは明らかだ。絶え間ない戦いが繰り広げられ、私たちは、

、それに打ち勝つ神の力が与えられない限り、私たちが圧倒してしまうような強大な敵と戦っている。悪魔であるサタンはクリスチャンの偉大な敵であり、その味方はこの世と私たち自身の墮落した肉である。(1ペテロ5:8; ヨハネ17:14と15; ローマ7:18)。使徒パウロは、自分自身についてこう書いている。「私は自分の肉体をスポーツ選手のように鍛え、なすべきことをなすように訓練しています。そうでなければ、人に説教した後で、私自身が失格になることを恐れるからです”。第一コリント9:27

この "打ち勝つ" という言葉は、クリスチャンが悪魔に打ち勝ち、世に打ち勝ち、自分の肉に打ち勝つことを表現するのに使われる。悪は、サタンが王子であるこの世の土台そのものである。悪に打ち勝つのではなく、善

を行うことによって悪に打ち勝ちなさい」(ローマ12:21)。(ローマ12:21)。ヨハネも励ましている：「神から生まれた者はみな、世に打ち勝つのです。これこそ、世に打ち勝った勝利(ギリシア語で成功の意味)、すなわち、私たちの信仰なのです。」  
第1ヨハネ5:4

## 神は愛なり

私たちの天の父は愛の創造者であり、時代を超えてそのスポンサーである。しかし、サタンは利己主義の創造者である。この2つの原則は、人間の墮落以来ずっと、互いに争ってきた。神の民-  
、どの時代においても神に忠実に仕えてきた人々は、神への愛に突き動かされてきた。彼らは神と神の御霊によって導かれてきたが、他の大多数の人類は利己主義の原則に支配された人生を歩んできた。

人は神に似せて造られ、その痕跡は今も残り、多くの人の親切な行いに現れている。(創世記1:27)。しかし、この世とその精神に打ち勝つには、時折親切な行いをすることではない。それは、自分のために生きるという原則から、神のために生き、神の奉仕に人生を捧げるという原則への転換でなければな

らない。罪のせいで、「自分自身」が人間一族に支配的な人生の動機として採用されてきた。それが普通とされるほど、世の中の生き方となっている。私利私欲はこの世を支配する原理であり、サタンは"この世の神"である。2コリント4:4

## 愛し合う

利己主義をなくし、愛の原理を人生の指針として地球全体に確立する唯一の方法は、神の救いの計画である。イエスにおいて、私たちは生き方としての愛の最も包括的な模範（  
）を示している。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。"と。ヨハネによる福音書13章34節

マタイ19:16-22、ルカ18:18-

23)。自己保存の掟に従って、彼は自分のためにこの世の財を蓄え、それを人に分け与える準備ができていなかったのだ。弟子たちは、金持ちの青年に対するイエスの忠告が、あらゆる私利私欲を放棄した無謀なものであることに当惑した。

## 真の弟子

ペテロはイエスに言った：「私たちはすべてを捨てて、あなたに従ってきました！では、私たちのために何があるのでしょうか。(マタイ19:27)。ペテロは、弟子として、イエスが若い富豪に課そうとした条件に従ったことを、イエスに思い出させたのだ。彼らのすべては彼のすべてほどではなかったが、原理は同じだった。このような犠牲を払った彼らは当然

、その見返りとして何が期待できるかを知りたがった。ペテロの質問は、彼がまだ弟子としての本当の精神を理解していなかったことを明らかにしている。彼はおそらく、名誉や名声のようなものを受け取ることを期待していたのだろう。謙虚な漁師である代わりに、メシアの王国で目立つ地位、支配者、あるいは人の中の偉大な者になることを望んでいたのかもしれない。

イエスは答えられた：「世が新しくなり、人の子がその栄光の座に着くとき、わたしに従ったあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくであろう。そして、わたしのために、家、兄

弟、姉妹、父、母、子供、財産を捨てた者はみな、その百倍の見返りを受け、永遠の命を受け継ぐのです」。(マタイ19:28-

29)。この一節から、主がクリスチャンに他者を犠牲にすることを望んでおられると誤解してはならない。家族から必要な安らぎや糧を奪うのは間違っている。しかし、そうして得た余剰は主のものである。

## 十字架を背負う

イエスが弟子たちに、エルサレムに行き、そこで逮捕されて死刑になることを告げたとき、ペテロはそれを聞かなかった。「しかし、ペテロはイエスをわきに連れて行き、そのようなことを言うてはいけないと叱責し始めた。「主よ、天は禁じておられます。「このようなことは、あなたには決して起こりません。イエスの返事はこうだった：「私から離れなさい、サタン！あなたは私にとって危険な罫です。あなたは、神の視点ではなく、単に人間的な視点から物事を見ているのです」(マタイ16：22-

23)。(マタイ16:22-

23)。ペテロは、私利私欲に流されて、敵が待ち構

えているエルサレムに行くなど、師を説得しようとしていたのだ。

ペテロは知らず知らずのうちに、サタンの大義を押し進めていたのである。サタンは常に、自分のことを第一に考えるよう人々に勧める。サタンが支配するこの世の人々は、自分のことを第一に考えることが多い。それは公然と彼らの生き方であり、エデンの時代からそうであった。イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたの中で、わたしに従いたいと思う者がいるなら、自分の道を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。もし、自分の命にしがみつこうとするなら、それを失うことになる。しかし、わたしのために自分の命を捨てるなら、それは救われるのです」24節と25節

イエスはその時でさえ、全世界の人類のために犠牲的に命を失っていたのだ。一般的に言って、今日の社会では、自分以外の人のことを考えるのは愚かなことだと考える人が多い。しかしイエスは、"自分第一

"という世俗的な原則に従うのではなく、神の方法で自分たちの命が救われるという事実に向け

ることで、ペテロや他の弟子たちの心と心に訴えかけたのである。

世に打ち勝つということは、クリスチャンとして、私たちがあらゆる面を取り囲まれている利己主義の原則に立ち向かうということである。神に、真理に、兄弟たちに仕えるために、私心なく命を捨てるのだ。(ピリピ3:7と8、第一ヨハネ3:16)。私たちは  
"世から出る

"ように召されているのでも、世から孤立して生きるように召されているのでもない。(ヨハネ17:15)。むしろ、私たちは世にいるけれども、その原則や基準から離れ、その利己的な精神に影響されないようにしなければならない。私たちに課せられている試練は、私たちが物理的にこの世に生き、働いている間、その一般的な精神に合わせることなく、神の愛の大義のために命を落とす努力を続けることである。ローマ12:2

## 死に至る洗礼

毎年、私たちの主イエスの犠牲の死を記念するとき、クリスチャンには豊かな祝福が待っている。象徴的なパンと杯を口にすることは、私たちがイエスの

犠牲の恩恵を受けることを表している。(マタイ26:26-

29)。こうしてイエスの身代わりの犠牲の恩恵を受けた私たちは、私たちに対する神の恵みを喜び、「日々死ぬ」、いわば自分を捨て、神のみこころを行うために命を捨てるという犠牲の特権をも思い起こすのである。(第1コリント15:13)。これには、世間から排斥されたり、体力を消耗したり、言葉によって私たちを中傷した人たちから傷つけられたりすることが含まれるかもしれない。

私たちはイエスの死にあずかるバプテスマを受けている。「バプテスマによってキリスト・イエスと結ばれたとき、私たちはイエスの死に結ばれたことを忘れたのか。私たちは死に、バプテスマによってキリストとともに葬られたのです。キリストが御父の栄光の力によって死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しい人生を生きることができるのです」。

私たちは彼の死によって彼と結ばれたのだから、彼のようによみがえらされるのである。ローマ6:3-5

私たちは、親愛なる主であり師である方の足跡をたどるよう、特別な招待を受けている。彼に

"ということは、私たちの世界での経験が彼と同じようになるということだ。

、奴隷は主人より偉いわけではない。また、使者はメッセージを送る者よりも重要ではない。"（ヨハネ13:16）。（ヨハネ13:16）。主人の足跡に忠実に従う者には、たとえ「理由もなく憎まれる」としても、約束が与えられている：「わたしが勝利して、父とともにその御座に座ったように、勝利する者は、わたしとともにわたしの御座に座るであろう。黙示録3:21